ふくふくかわら版

医療・介護・福祉コミュニケーション情報誌

麻生教育サービス株式会社　URL http://www.aso-education.co.jp/

2018
VOL.98

Report 介護現場の将来を考えるイベントが開催される

「介護ロボット等を活用した先進的介護に関するシンポジウム」

AES
ASO EDUCATION SERVICE CO.,LTD

Pickup Report 特集

介護現場の将来を考えるイベントが開催される

「介護ロボット等を活用した先進的介護に関するシンポジウム」

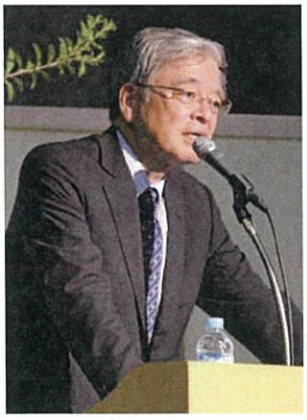
介護職員の負担を軽減し、介護の質や高齢者のＱＯＬを向上する取組みは、少子高齢化を迎えた日本では急務となっています。昨年7月16日に、北九州市で行われた「介護ロボット等を活用した先進的介護に関するシンポジウム」は、こうした課題を考えるためのシンポジウム。北九州市では介護現場へ介護ロボットなどを導入する実証実験がすでに始まっており、先進的な取組み事例を含めて、さまざまな意見交換が行われました。その様子をリポートします。

来賓として大臣2名が登壇

主催者挨拶に続いて登壇したのは、厚生労働大臣(当時)の塩崎恭久氏。「日本の社会保障制度については世界が注目しており、日本が成功モデルをつくることが期待されている」と語りました。また内閣府地方創生規制改革担当大臣(当時)の山本幸三氏は、「これからは介護のシステム、日本が持っているノウハウ、介護ロボットが最大の輸出商品になる」と述べ、国家戦略特区の活用推進を語りました。

将来についての2つの基調講演

前半の中心となったのが2つの基調講演です。1つ目は元厚生労働省老健局長の中村秀一氏が、「これからの介護と介護ロボット等への期待～介護政策に従事してきた立場から～」と題して講演しました。長年、厚生労働省でさまざまな施策に従事してきた中村氏は、今後の介護はどうあるべきか、また導入が進む介護ロボットに何を期待すべきかについて語りました。同時に、これからの介護は高齢者のお世話ではなく、自立支援に軸足を置くべきと述べています。



中村秀一氏

続く2つ目の講演では、慶応義塾大学医学部の医療政策・管理学教室教授である宮田裕章氏が、「ＩＣＴの変革が実現するヘルスケア新時代」と題して講演しました。超高齢化、経済成長の鈍化、人口減少、少子化と、あらゆる面でマイナス要素のある日本で課題を解決していくことがいかに重要か、またその過程でＩＣＴが果たすであろう大きな役割について述べました。具体的で先進的な事例は非常に興味深く、介護に関わる方には参考になることも多かったのではないでしょうか。一方で、今後は介護業界においても大きな変革が行われることが予想され、テクノロ

操作体験コーナーの一部

宮田裕章氏

ジーをどう使いこなすかは介護現場にとっても大きな課題となりそうです。

パネルディスカッション「先進的介護」が日本を救う

～介護ロボット・センサー等で施設の介護はどう変わる～

北九州市長 北橋健治氏による「北九州市の挑戦」

基調講演に続いて計7名の参加者によるパネルディスカッションが行われました。実際に全国各地で先駆的活動をしている、介護施設、開発メーカー、学術・研究機関などの実践者を迎えて、介護ロボットやセンサーなどの開発の現状、機器のあり方、介護を支える家族や介護事業者、地域住民などについて意見交換が行われました。全体のコーディネーターを務めたのは、マッキンゼー&カンパニー日本支社シニア・クライアント・アドバイザーの武内和久氏です。

コーディネーター
武内和久氏
（マッキンゼー&カンパニー日本支社 シニア・クライアント・アドバイザー）

武内氏からは事前に「介護ロボットは未来の介護の姿、社会のありさまをどのように変えるか」および「介護ロボットの導入普及の動きに欠けている視点、必要なもの」という2つのテーマについて質問がなされ、各パネリストが自身の経験を交えながら展望を述べていきました。

ディスカッションの内容は、新規事業やトライアルを行う場合の課題、介護業界と他の業界との違い、現場の声を反映してどう開発していくかなど多岐に渡り、実際に現場での取組みも紹介されました。「AIや情報システムとロボットは、頭と体の関係」という意見もあり、手段ではなく、どう価値を生み出すかに主眼の置かれた議論となりました。

討論の最後に、パネリストが介護事業者などへ向けたメッセージを発信しました。

石川氏「遠い先まで見なくていいので、まずはトライしてほしい。ロボットを入れることで高齢者の生活は大きく変化していく」

泉氏「介護ロボットは毎日使うものなので、ロボット開発者はいかに使いやすいものにするかに配慮してほしい」

坂根氏「介護については多職種連携がいわれているが、介護のサイエンス化はエンジニアの業種も超えて一気にやらないと発展しないと思う」

中村氏「介護現場の職員たちの声をしっかり受け止め、それをプラスに転換することが大事。開発者にはそういう声をたくさん聞いていただきたい」

福田氏「事業者にとってはハードルの高いチャレンジになると思う。まずは成果が出やすいところからやるべき」

宮田氏「一施設だけでデータを集めても限界があるので、例えば北九州市全体で取組むなど、最先端のプラットフォームの構築を期待している」

武内氏「介護ロボット等を活用した先進的介護には大きな追い風が吹いている。それをうまく利用して、新しい取組みを実現・発信してほしい」

パネリスト（五十音順）

石川紘嗣氏（社会福祉法人香東園 法人事務局 次長）
泉博之氏（産業医科大学産業生態科学研究所 人間工学研究室 准教授）
坂根裕氏（デジタルセンセーション株式会社 代表取締役CEO兼CTO）
中村順子氏（社会福祉法人孝徳会 介護老人福祉施設サポートセンター門司 施設長）
福田升二氏（株式会社エス・エム・エス 介護事業本部長）
宮田裕章氏（慶応義塾大学医学部 医療政策・管理学教室 教授）

北九州市の果たす役割

①北九州市の果たす役割とは？

北九州市は、超高齢社会が抱える介護人材の不足などの問題に対して「全世界において先陣を切る、モデルにならなければならない」と考えています。

北九州市は、もともと高齢社会対策の分野における先駆けとして昭和63年からその取り組みを進めてきました。日本の政令市の中でも最も高齢化が進んだ、つまり世界で最も高齢化が進んだ都市であり、自ら高齢社会への対応策を考えないと、「先例」などありませんでした。北九州市には、今までこの問題にともに取り組んできた「企業（ものづくり）」「大学（研究機関）」「市民」「市民団体」があり、そこに培われたノウハウがあります。これらを生かし、超高齢社会が抱える問題について、どう対応するのか、1つの見本となることがわれわれの役割です。

②介護ロボット導入促進には、どういう意義があると考えていらっしゃいますか？

介護ロボットは、介護者の「身体的負担」と「精神的負担」を軽減してくれるものです。

介護業界では、腰痛をはじめとした「身体的負担」と利用者やその家族とのコミュニケーション上のストレス、低賃金に対する不満などの「精神的負担」が大きな離職の原因となっています。

ロボットを「人の代わり」ではなく「人の負担を軽減してくれるもの」として導入することで、業務が効率化・省力化され、できた時間を新たな仕事や休憩時間に充てることができれば、介護職の方の「体力的」「精神的」負担の軽減につながります。

また、ロボット導入による効率化・省力化で現場に必要な人員を減らせて、もし10人で分配していた給料を8人で分配できれば、介護職の給料を少しでも増やすことができます。現行の介護報酬制度の中でそれが難しいのであれば、北九州市での実証結果（エビデンス）をもって、国に新たな加算の提案を行うことができる。これが大きな意義だと思います。

③今後の展開について

「介護ロボットの普及」が目的ではありません。普及によって介護業界に「働きやすい職場」を実現することが、介護現場で働きたいという人の増加につながり、介護サービスの質をより向上させ、さらに介護職と利用者の笑顔につながる。

これが現実になれば、北九州市は「介護業界に働きやすい職場を実現したロボット産業の拠点」となることができ、製造業でのさらなる雇用を生み、北九州市全体の魅力の創造につながる。北九州市は「高齢化が進んでいる状況」を強みと捉え、超高齢社会への対応を切り口とした1億総活躍社会を実現することで、世界中の高齢化している都市に対して、「高齢社会でも、こういうふうになったらいいよね」という活気のある街づくりのモデルになれるのではないでしょうか。

北九州市保健福祉局
先進的介護システム推進室
介護ロボット担当係長　馬場 宗一郎氏

医療と介護のトータルヘルスケア
白十字

【挑戦】白十字は、肌にやさしくなれるか。

高温多湿で、アルカリ性に傾きやすいおむつの中。これが、ムレやカブレの原因のひとつです。おむつ内環境の改善を目指す白十字にとって、なんとしても克服したい問題でした。
この難題に取り組んだのは、ブランドマネージャーの田中大樹。「おむつ内のpH値を調整し、肌と同じ弱酸性に保てれば、肌トラブルは減るはずだ」。試行錯誤を繰り返し完成したのが弱酸性のサルバ。心地よいのがあたり前の紙おむつへ。挑戦は続きます。

医療から
生まれた
思いやり

サルバ
www.hakujuji.co.jp/salva/

ふくふくかわら版 VOL.98

■発行／麻生教育サービス株式会社
〒812-0011 福岡市博多区博多駅前3-25-24 八百治ビル4F
TEL:092-482-7006　FAX:092-482-0453
URL:http://www.aso-education.co.jp/

■編集・デザイン／株式会社読売広告西部
〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-16-5 読売新聞西部本社内
TEL:092-741-8997　FAX:092-714-0681
■発行日／平成30年2月